

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	商学部
大項目	11 教員・教員組織
中項目	
小項目	11.0.1 大学として求める教員像および教員組織の編制方針を明確に定めているか。
要素	教員に求める能力・資質等の明確化 教員構成の明確化 教員の組織的な連携体制と教育研究に係る責任の所在の明確化
小項目	11.0.2 学部・研究科等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。
要素	編制方針に沿った教員組織の整備 授業科目と担当教員の適合性を判断する仕組みの整備 研究科担当教員の資格の明確化と適正配置(院・専院)
小項目	11.0.3 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。
要素	教員の募集・採用・昇格等に関する規程および手続きの明確化 規程等に従った適切な教員人事
小項目	11.0.4 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか。
要素	教員の教育研究活動等の評価の実施 ファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施状況と有効性

### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

#### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 欠員を速やかに補充する。	→専任教員と任期制教員の採用・補充によるST比の改善。	C	B	B	B	B
2. 教授研究会活動を活性化する。	→教授研究会の実施回数、参加人数、報告数の増大。	C	B	B	B	B
3. FD活動を強化・充実する。	→FD研究会の実施回数、参加人数、報告数の増大。	C	C	B	B	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

#### 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 専任教員、任期制教員の欠員の補充に努め、2013年度においては専任教員1名、任期制教員1名を採用した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2012年度の採用分を含めて、この2年間で専任教員2名、任期制教員2名が増員となったが、定年退職による教員減と合算すれば、大幅な欠員補充は実現できていない。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後とくに任期制教員の枠をこのまま維持し、欠員の補充とすることが望ましいのかどうかについては、あらためて一定の検討が必要である。そのためには「人事委員会」の機能自体から問い直す必要があり、この点については客観的な答申を得るべく「将来構想委員会」に諮問を行う予定である。	☆
		その他	☆

目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 年4回の教授研究会を開催し、教員の研究活動の相互理解をはかってきた。2014年度に入って、教授研究会の運営にあたる「研究会委員会」とファカルティ・ディベロップメント研究会の運営にあたる「ファカルティ・ディベロップメント委員会」コンビーナとを同一人物が兼務することにより、両研究会の連携を図り、より効果的な研究会の開催ができるようにした。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 両研究会の日程調整が容易となったため、今後、商学部全体を俯瞰した研究会の運営がなされるものと期待される。また、研究会参加者の増加を図るための具体的な施策（質疑応答の形式の改善等）が「研究会委員会」からあらたに提案された。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 教員の業務量が増加する中で研究会を一方向的に充実させても、かえって負担感が増す可能性もある。全学的な各種業務の日程をにらみつつ、効果的な教授研究会が実現するよう、今年度、「研究会委員会」に対して諮問を行う。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか ファカルティ・ディベロップメント委員会の設置が全学的に求められて以降、商学部においても、独立したファカルティ・ディベロップメント委員会の主催によってファカルティ・ディベロップメント教授研究会が原則として年間複数回開催され、教授会メンバーのほとんどが参加している。ファカルティ・ディベロップメント活動のより一層の充実に向けた教員の関心は高く、シラバス、カリキュラムの点検、改善を常時行うため、ファカルティ・ディベロップメント委員会が定期的に開催されている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ファカルティ・ディベロップメント委員会を中心とした各種ファカルティ・ディベロップメント活動の成果は、高等教育センターが刊行する『FD News Leter』において毎年度、報告、公開されてるようになった。諸活動を通じて、教員の間には一定の関心の高まりがみられる。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か これまでの活動が一定の成果を上げており、今後も現状の活動を着実に継続することが重要である。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆